

氏 名	加藤 文彬
学 位 の 種 類	博士（ 文学 ）
学 位 記 番 号	博 甲 第 7607 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	陶淵明受容研究

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	小松 建男
副 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	谷口 孝介
副 査	筑波大学 准教授	博士（文学）	稀代麻也子
副 査	青山学院大学 名誉教授	博士（文学）	大上 正美

## 論 文 の 要 旨

本論文の目指すところは、鮑照・王績の詩文を主な対象としてとりあげ、陶淵明の詩文が後の時代にどのように受容されていくのかを明らかにすることにある。論文の構成は以下の通りである。

### 序

#### 第一部 陶淵明の文学

- 第一章 陶淵明詩文に於ける「遠」字とその展開
- 第二章 「読山海経」詩十三首考
- 第三章 「自祭文」考
- 第四章 「擬古」詩九首考

#### 第二部 鮑照の文学

- 第一章 「学陶体」の系譜
- 第二章 鮑照の時間認識

#### 第三部 王績の文学

- 第一章 「山中独坐自贈」「自答」詩考
- 第二章 「古意」六首考
- 第三章 「過山觀尋蘇道士不見題壁」四首考

### 結

序において、従来研究を概観したのち、第一部では、受容の対象となる陶淵明の詩文をとりあげ、その特色についてあらたな見解を提示する。まず第一章において、陶淵明の詩中に見える「遠」の特異な用法を検討し、陶淵明が、現実や自己の生とどのように対峙したのかを探求する。陶淵明は、ものではなく人間の精神に関し

て「遠」ということがある。この場合、「遠」は、「我が世を遺（わす）るる情を遠くす」（「飲酒」其七）、「心遠ければ」（「飲酒」其五）、「百情遠し」（「連雨独飲」）のように、隔たっているという状態ではなく遠くへの移動という働きを意味している。これらの作品の分析を通して著者は、「遠」という心の動きによって自己の生が満ち足りてゆくことの確認や、不可避の死に対する超克という解決の獲得が可能になったと主張する。

第二章は、「読山海経」十三首をとりあげ、一貫した構造をもつ連作詩であるという観点から分析する。その結果、其一において自己が有限な存在であることを確認した後、其七までは不死の存在への羨望が詠われ、其八において再び人間の有限性に言及し、其九以下は限りある存在が詠われると言う円環構造をなしていることを明らかにする。第三章は「自祭文」をとりあげ、陶淵明の死生観を検討する。「自祭文」はその冒頭で死を達観しながら結びにいたって死に対する恐怖が見えている。これをうけて、吉川幸次郎氏が、「矛盾を矛盾のままに表白しているのが、陶淵明の文学なのではないか」と指摘し、これが死生観についての定説となっている。著者は、陶淵明の詩に死がどのように詠われているかを検討し、人である以上必ず訪れるものとしての死（普遍の死）と、必ず自らに訪れるものとしての死（個別の死）があることを指摘する。「自祭文」に見られるとされてきた矛盾は、個別的な自らの死を、客体化して祭文という普遍的な形式によって表そうとしたことによるものであると主張する。

第四章は、「擬古」九首をとりあげる。「擬古」は、王朝交代期という当時の社会状況を考慮しないと理解の難しい詩である。これまでも、詩中の幾つかの語彙に現実に行っていることの寓意を読み取るということも行われてきた。著者は、連作全体の構造から作品を読み解き、「古」の世界を肯定的にうたうことによって、そうではあり得ない「今」現在を嘆くという手法をとっていることを明らかにする。

第二部では、鮑照に始まる「学陶体」の系譜を提示し、後生の詩人の陶淵明受容が、単なる模倣作あるいは自らを陶淵明と一体化させるものに限定されないことを明らかにする。第一章では、鮑照・江淹・白居易における「学陶体」の詩をとりあげ、彼らの「体に学ぶ」とは、陶淵明になりきれない自己を詩作によって発見する行為であり、このような受容の在り方は、鮑照に淵源し、白居易に至って陶淵明とは異なる自己の発見となると主張する。第二章は、鮑照の詩文の分析によって、彼の空間描写が、眼前の景物をいかに描写するかに重点が置かれ、陶淵明のように景物の中に自己存在を確認するものではないこと、時間についての認識が、陶淵明のように自らの死を見つめるものではなく、不遇な自己を規定するものとして把握されていることを明らかにする。

第三部は、王績をとりあげる。王績は、実生活においても様々な方法で自らを陶淵明に重ね合わせようとしている。このため王績は、陶淵明の単なる模倣者と見なされがちであった。しかし著者によれば、王績は、陶淵明をはじめとする隠士・高士の姿を、連作詩の中で自らに重ね合わせているが、それは、思慕・比擬ではなく、陶淵明とは異なる自己を発見していくための否定的媒介として機能していると言う。第一章では、「自贈」・「自答」という自己と自己の対話形式の詩をとりあげる。乱世の隠者であった陶淵明と異なり、王績は太平の世の隠者である。彼は、太平の世に隠者たることを否定的に捉える自己とそれを肯定しようとする自己がこれらの「自贈」・「自答」という自問自答形式の詩作の中で最終的に止揚されるという。第二章では、「古意」六首をとりあげ、連作詩として分析を行う。「古意」は社会の混乱の中で、職を辞した王績が、隠者となって社会と断絶した状態でありながら、社会への積極的な関わりに執着する自己が詠われているという。第三章では、「過山観尋蘇道士不見題壁」四首をとりあげる。この詩は、「遊仙」と題するテキストが有り、内容は確かに「遊仙詩」のようにも見える。しかし著者は、「遊仙詩」であることを否定し、仙界はたどり着けない場所として提示され、そのあとに会えなかった蘇道士の住む場所が疑似的な仙界として描かれていると指摘する。そして第四首において、その疑似的な仙界にすら止まり得ない自己を確認することになると言う。結においては、

以上の考察をまとめた上で、陶淵明研究における位置づけを行い今後の展望を述べる。

## 審 査 の 要 旨

### 1 批評

陶淵明の詩文を後の世の人々がどのように受容してきたのかについては、大矢根文次郎『陶淵明研究』（早稲田大学出版部、1967）以降盛んに研究が行われている。近年中国においても、李劍鋒『元前陶淵明接受史』（齊魯書社、2002）のような詳細な論考が出版されている。しかしこれら従来の研究は、陶淵明の生き方と詩を愛した人々が、自らの詩作において表現や語彙をどのように踏襲しているかということに関心が集中している。本論文は、陶淵明文学の際立つ内容を明らかにした上で、その後の陶淵明の詩文を受容した詩人達が、彼の作品と向き合う中でいかにして詩人として独自の世界を構築したのかを明らかにしたものであり、今後の陶淵明受容研究に新たな展望を開くものである。第二部において提示された「学陶体」の系譜は、これまで個別の詩人と陶淵明の関係として、前後の脈絡なしに取り上げられていたものに、新たな一つの流れを見だし、受容と変容の過程として記述することに成功している。

本論文がとりあげている、陶淵明・鮑照・王績・白居易はいずれも、複雑な心理を詩に託す詩人である。これらの詩人について、著者が新たな解釈を提示し得たのは、その深い読みによるところが大きい。しかしそれは、詩の一部、あるいは一語をとりだして主張されたものではない。著者は、常に広く全体を見渡し、詩人の詩中から用例を集めて証拠とし、また詩人が念頭においたであろう先人の著作に注意を払って、自らの読みの正しさを裏付けている。例えば、第一部第三章において、陶淵明の死に対する矛盾した態度について、陶淵明の詩文のうち死に言及するものを逐一検討して「普遍の死」と「個別の死」の違いを見だし、「自祭文」の先行研究の限界を超えて、新たな解釈を示し得たことなどは、この深い読みと広い視野があって初めて可能となったものである。

著者の、この広い視野に支えられた深い読みは、第三部において遺憾なく発揮されている。王績については、これまでのところ高木重俊『初唐文学論』（研文出版、2005）を除けば、参照すべき論考はほとんどなく、本格的な注釈も少ない状態である。著者は、連作詩を中心に据え、王績が作詩にあたり念頭においたであろう先人の詩文を丹念に拾い出し、また王績の他の詩を参照しつつ、連作詩を個別にではなく、連作全体を通して何を言わんとしているのかを探求し、王績の詩文中に、単なる愛好の対象としてではなく、自己を捉えなおす契機としての陶淵明の受容が明確に表れていることを明らかにした。これは、従来の王績研究に大きな見直しを迫るものであり、王績の屈折した心理を読み解いた著者の力量は高く評価できる。

以上のように優れた論考ではあるが、なお課題も残されている。第二部以下において陶淵明との関連性が見えにくくなっている箇所もあるやに思われる。しかしこれは著者の今後の精進に期待すべきものであって、本論文の価値を何ら損なうものではない。

### 2 最終試験

平成 28 年 1 月 21 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。

